

---

# CAR LOVE LETTER 「Necessary」

YAS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C A R L O V E L E T T E R 「N e c e s s a r y」

### 【Nコード】

N 9 1 3 6 H

### 【作者名】

Y A S

### 【あらすじ】

彼は憧れの車を手に入れた。けれどもそれを友達にひた隠す。想いをよせるあの子にも。（テーマ車種：ホンダインテグライタイプR（DC2））

（前書き）

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持ったことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: HONDA INTEGRA Type R(DC  
2)>

よし、誰も居ないな。

俺はいつもの様に、こっそりと車を駐車場に滑り込ませる。

こっそりって言ったって、こんなうるさいマフラー付けてて良く言うよな、俺も。

俺の車はインテグラType R。ホンダのスポーツクーペなのさ。中坊の頃に好きになって、免許取ったら絶対乗ると決めていた。

大学に入ってバイトして金貯めてさ、やっとの思いで念願叶ったんだけど、今はこの車の事は連れには内緒にする必要があるんだ。

それと言つのも、あの子の為。あの子つてのは、ほら、文学部のあの子さ。

すげーかわいくて、髪も綺麗でスタイルも良くてさ、芸能人で言ったら月九のあのヒロインの子に似てる感じだな。

一年の頃の学祭で、ミスキャンパスに選ばれたとか、芸能事務所からも声がかかるとか、とにかく学内でも目立つ存在だった。

友達になりたかったんだけど、俺は工学部で、あの子は文学部。接点なんか全く無いんだけど、実はひとつだけあったんだ。

高校の時の同級生のあいつ。あいつとあの子は同じ学科でさ、あいつのツテを使って、俺の学科の奴らとあの子含めたあいつの学科の

女の子達と合コンすることになったんだ。

あいつって言っても、女なんだけどね。

背が低くて、髪も短くて、ついでに気も短くて、まあかわいい感じ  
なんだけど、あんまり女を感じないんだよな。高校の時からそんな  
感じだったからなあ。おっぱいは結構でつかいんだけどさ。

そのあいつの手引きの合コンで、俺達工学部連中と、あの子とあ  
いつの文学部女子達は意気投合してさ、仲良しグループみたいになっ  
たんだ。

バーベキューしたり、京都に遊びに行ったり、冬にはスキーに行っ  
たりさ、みんなでいろいろ遊んでいたんだけど、いつも車を出すの  
はエステイマのヤツと、キューブのあんにやろうだった。

俺がインテグラを買う前に、あの子と車の話になったんだ。どんな  
車が好き？って言う様な、他愛も無い話さ。

その話のしょっぱなで、「スポーツカーは嫌！」と出鼻をくじかれ  
てしまったんだ。俺は、「スポーツカーなんて良いよな！」って切  
り出そうとしてたんだから。

俺はどうしてもインテグラが欲しかったし、でもあの子に車オタク  
とか思われたくないし、悩んだ結果、俺はインテグラの存在をひた  
すら隠す事にしたんだ。

車だけじゃない、髪型とかファッションとかも、なるべくあの子に  
受けそうな感じにしたいと思っていた。でも女の子の、とりわけあ  
の子の趣味とか分からないから、俺はちよくちよくあいつにアドバ  
イスもらって、女の子の思考を学んだんだ。結構あいつ、親身にな  
って相談乗ってくれてさ、ホント助かるんだよ。

その甲斐あつてかさ、少しずつだけど、あの子との距離がだんだん近くなって来たんだ。

そのうち、二人でどこか行こうか、なんて話もしてる。

今日はキューブのあんにやろうの部屋でみんなが集まって飲もうって話になった。俺はバイトだから、終わってから行く事にしたんだ。

バイトに出勤するために、学校の駐車場のインテグラに乗ろうとする俺。そこに何と、偶然あいつが通りかかる。

「何なにこの車！すごいじゃーん！買ったの？」目をキラキラさせながらあいつが詰め寄ってくる。

「あ、うーん、ま・・・まあね。」あっちゃ・・・ハイテンションなあいつに対し、かなりへこむ俺。

「ラッキー！ねえ、これからバイトなんだ。駅まで乗せてって！」しゃーねーな。乗れよ。俺はあいつを乗せて、学校の駐車場をそそくさと後にする。だって他の誰かにも見付かったらまずいからさ。

助手席のあいつは終始ご満悦な様子。くそー、初めて助手席に乗せた女の子が、あの子じゃなくてあいつとは・・・。

なあ、絶対誰にも言うなよ！

「いいじゃん別に。スポーツカー乗ってたってさ。」髪の毛先を指で撫でながら、あいつは何で？という顔をする。

いーの。とにかくみんなには内緒だからな！

「ふーん、あ、そっか。」何かを感付いた様な表情で、あいつはまた髪の毛先を指で撫でる。

あいつを駅に降ろす。するとあいつは「じゃね、ありがと。またよろしくね！」とウィंकを飛ばしてきた。

うっせー！バス乗れバス！

バイトの後に、キューブのあんにやろうの部屋に行く。

俺よりも先に、あいつはあんにやろうの部屋でみんなと飲み始めていた。

俺があの子の隣に座ると、あいつの意地悪い視線を感じる。完っ全にバレたな。すごい弱味を握られた感じた。

しかしそれから、あいつはインテグラの事を誰かに喋ったりはしなかったし、服の趣味とか、お洒落なカフェを教えてくださいとか、更に協力的になってくれた。

その上、インテグラの事をみんなに打ち明けたら？とも言ってくれた。

「しょうがないじゃん。好きなんだからさ。」と。

俺としても打ち明けたかったんだけど、ここまで隠して来たし、何だか気が引けたんだ。

それから少しして、俺達の仲間のバランスが少し崩れて来たんだ。エステイマのヤツと仲間内の女の子が付き合い始めてさ。まあ前からそんな雰囲気あったけどな。

後、キューブのあんにやろうが故郷に帰る事になっちゃって、いつも車を出してくれてた奴らが居なくなっって、何となく俺達のまとまりがなくなっって来たんだ。

その分、俺とあの子の距離はまた少し接近した感じだった。

次の週末に、日帰りだけど、あの子と温泉に行く事になった。もちろん、電車とバスでね。インテグラの事が喉まで出かったんだけど、「スポーツカーは嫌!」というあの子の顔が思い浮かんで、やっぱり飲み込んだ。

温泉の日帰り旅行の当日は、俺は三時間も前から服を選んだり、髪型を整えたり、まるで女の子みたいに準備していた。

その時、あいつから電話がかかって来たんだ。朝早くから珍しい。

「もしもし。どした?」

「ごめんね。今日、時間ある?」小さく消えちやいそつな声が電話の向こうから聞こえる。

「あー、いや、今日は・・・。」と俺が口ごもっているとあいつは「あ、そつか。ごめん。何でもない。」と、ぶつと電話を切った。

何なんだよ。俺はあいつにかけ直す。

「おかけになった電話は、電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため、かかりません。」

んな訳無いじゃん。今かかって来たんだぞ。あいつ、電源切りやがったな。

何か、すごい調子悪そうだったな。大丈夫かな。

俺は出かける準備をしながらも、あいつの事で頭がいっぱいだった。

・・・やっぱり、あの子には申し訳無いけど、ちょっと今日はキャンセルさせてもらおう。お互い友達だし、わかってくれる筈だ。俺はあの子に電話をかけた。

「ごめん、あいつがどうも体調崩したらしいんだ。悪いけど、今日の約束はまたにさせてもらえないかな。埋め合わせ、するからさ！」と俺が言つとあの子は、

「埋め合わせ？何か勘違いしてない？あたし、君とはそういう関係じゃないけど。」

と電話を切った。

何だよ？！今の！ムツカー！！

すげーお高くとまってるさ。前からワガママで性格悪いなあと思う事もあったけど、ここまでとはな。

俺は迷う事無く、インテグラの鍵を掴んで部屋を飛び出した。

向かうは、あいつのアパートだ。

あいつの部屋はカーテンが閉まってて、居るのが居ないのか分からなかった。寝てるんだろうか？俺はあいつの部屋の呼び鈴をリンリン鳴らす。

程なく、真つ青なしかめっ面のあいつが出てくる。

「何で？何でここに居るの？」蚊の鳴く様な声で、あいつは辛そうにそう言った。おいおい！大丈夫かよ？

「着替える。病院行くぞ。」

「いいよ。寝てれば治るから・・・。」

「いいから、早く！」

しばらくして、ジャージを羽織ってふらふらとあいつが出てくる。症状を聞くと、吐気がして腹痛が酷いらしい。何科に行けばいいんだ？内科？外科？産婦人科？

とにかく俺は、街のでっかい病院へインテグラをぶっ飛ばした。こ

ういう時は、インテグラの様なスポーツカーの運動性能が役に立つ！

「ねえ、何でここに居るの？だって今日は・・・。」とまたあいつは聞いて来る。

俺はあいつの頭をくしゃくしゃと撫でて「いいから、休んでろ。」と話をはぐらかした。

病院での診察の結果は、何と軽い食あたりだと言う事だ。

おいおい。何を食ってんだ、何を！

薬をもらって帰る頃には、あいつの顔にも少し赤味がさしてきた。よかった、回復してきたんだな。

帰りのインテグラで、あいつはまたこう言ってきた。

「今日はありがと。助かったよ。でも、どうして来てくれたの・・・？」

俺はそれに質問で反す。

「お前こそ。何で俺に電話してきたんだよ？」

するとあいつは少しの沈黙のあと、インテグラのマフラーの音にかき消されそうな小さな声で、ぼそっとこう言っただ。

「しょうがないじゃん。好きなんだからさ。」

それを言っで、小さいあいつは助手席で更に小さくなった。

「あたしの質問に答えてない。」というふくれっ面の小さいあいつに俺は、「しょうがないじゃん。好きなんだからさ。」と笑って答えた。

その日から、あいつは「あいつ」じゃなくて、「彼女」になった。

俺にとって必要なのは、モデルみたいな高飛車な子じゃなく、いつも俺のそばにいて、俺にアドバイスをくれて、俺を頼ってくれて、そして俺の事を理解してくれる、彼女なんだ。もうインテグラを隠す必要は無い。だって、好きなんだからさ。

結局俺達の仲間は空中分解してしまった。でもまあ、それでよかったのかも知れないよ。

しばらくして、俺と彼女が学食で昼を食っていると、あの子がやってきた。

「そう言えばさ、あの時の埋め合わせ、してもらってないよね。」  
挑戦的な視線を彼女にぶつけ、相変わらず派手な格好で、あの子は俺に詰め寄って来た。

不安気な彼女をよそに、俺は冷静に彼女の手を握り、あの子に言うてやった。

「埋め合わせ？何か勘違いしてないか？俺、君とはそういう関係じゃないけど？」

あの子は綺麗な顔を真っ赤にして、俺達のテーブルを蹴飛ばして行ってしまった。眉間にシワを寄せてさ。おいおい、美人が台無しだぜ。

どうやらあの子、俺以外にも何人かの男と遊んでたらしいな。分かん事もない。だってあんなに美人なんだもんな。

でも、その男達も結局はあの子に愛想を尽かしちゃったみたいだ、つてのを誰かから聞いた。

分かん事もないな。

今日も彼女を助手席に寄せ、俺はインテグラを走らせる。

「この車、乗り心地悪いしマフラーうるさいよ。」と彼女は文句を言う。

「しょうがないじゃん。好きなんだからさ!」

俺はアクセルをぐつと踏み込む。インテグラType Rは、更に甲高い咆哮を上げ、大学の駐車場をあとにした。

（後書き）

本作はCAR LOVE LETTER「Forgotten word」、「Voiceless regret」の姉妹作品です。そちらもご覧いただければ、よりいっそうお楽しみいただけると存じます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9136h/>

---

CAR LOVE LETTER 「Necessary」

2010年12月4日14時52分発行